

日本・イスラエル比較文化研究
—日猶同祖論考—

大塚清恵
(2006年10月18日 受理)

A Comparative Study of Japanese and Israeli Cultures
—On Jewish Diaspora in Japan—

OTSUKA Kiyoe

To Isaiah and David

ABSTRACT

The ancient kingdom of Israel, which consisted of 12 tribes, was in circa 922 B.C. divided into the southern kingdom of Judah and the northern kingdom of Israel. 10 tribes out of the 12 belonged to the northern kingdom and the rest to the southern kingdom. The people of the northern kingdom were exiled to Assyria in 722 B.C. never to return to Israel. They are called "the Ten Lost Tribes of Israel." They were dispersed all over the world. Their descendants are found not only in the western world, but also in the eastern world especially along the Silk Road. Japan and Israel are geographically far from each other and seemingly unrelated nations. However, the two nations are remarkably similar in mythology, religious rituals, language, daily customs, etc. Some of the Japanese and Jewish scholars who are conversant with the ancient cultures of Japan and Israel claim that numerous striking similarities between the two cultures are proofs indicating that the Ten Lost Tribes of Israel came to ancient Japan.

The purpose of this paper is to examine the authenticity of their claim by making a comparison of the ancient cultures of Japan and Israel, which may help solve some of the cultural riddles of Japan such as why Japanese like rectangles or why Japanese have numbers in their names.

キーワード：イスラエル，トーラ，日猶同祖論，ゲマトリア数秘術，契約の箱

研究動機：

「日本の文化の基本形は長方形ですね。」と、ある外国人が言ったことがある。言われてみれば、確かに、日本人が作るものは長方形のものが多。畳、障子、座卓、着物、賽銭箱、弁当箱、墓石、豆腐、羊羹、「鰻の寝床」と言われるほど細長い京都の町屋等…。が、何故、日本人は、長方形が好きなのだろうか。と自問すると理由はわからない。理由は謎である。また、日本人のもう一つの特徴は数字が好きなことである。人名、法人名、地名など、あらゆる物のなかに数字がはいっている。壺与、一条兼良、二宮尊徳、二葉亭四迷、三井高利（財閥の祖）、天草四郎時貞、五木寛之、六本木、八王子、九十九里浜、十返舎一九、宮本百合子、倉田百三、千利休、野村万蔵、岩永三五郎（建築家）、吉田五十八（建築家）、山本五十六、直木三十五など、数え上げたらきりが無い。数字の中で「八」は、八幡宮、八坂神社、八咫鏡、八百万の神々、法華八講、八卦など、宗教に関係したものにつけられる聖なる数字である。何故、かくも日本人は数字が好きなのか。何故、「八」は聖なる数字なのか。これも謎である。

日本人の名前のもうひとつの特徴は、イスラエル人の名前と共通したものが多いことである。ナオミ、サラ、セト、アキラ、アイ、ヒビ、モリヤ、エリコ、ハガ、ヨナなどがその例である。名前以外にも日本民族とユダヤ民族には、多くの類似性があり、著名な日本のイスラエル文化研究者とイスラエルの日本文化研究者は、古代日本にイスラエル人が渡来し日本の伝統・文化の基礎を作ったと主張している。紀元前、世界中に離散したユダヤ人の一部が日本に渡来し、日本人の祖となったと言う説は、「日猶同祖論」とよばれている。日本とイスラエルの文化を比較しながら、日猶同祖論を検証し、日本固有文化の謎を解明したいと思う。

ユダヤ古代史：

2004年の調査では、ユダヤ人の人口は約1300万人である。人口分布は、米国（582万）とイスラエル（540万）に集中し、旧ソ連（60万強）、フランス（60万）、イギリス（27万）、アルゼンチン（20万）、ブラジル（10万）、南アフリカ（10万）、オーストラリア（9万）、ドイツ（7万）、その他、イラン、モロッコなど世界中に離散している。日本にも1000人程度のユダヤ人が居住しているが、ほとんどが短期滞在者である。¹⁾

現在のイスラエル共和国（1948年建国）は半世紀の歴史しか持たないが、神話的なアダムとイブの時代（前3000年？）まで含めるとユダヤ人には5000年の歴史がある。アダムとイブの三男セトは、兄妹婚で子孫を徐々に増やしていくが、人間たちが墮落し、地上に悪がはびこるようになると、神の怒りに触れ、信仰心厚いノアの一家だけを残して、その他の人間はことごとく大洪水（前2293年頃）によって滅ぼされてしまったと創世記には書かれている。有名な「ノアの箱舟」は、長さ132m×幅22m×高さ13mという「鰻の寝床」のような細長い巨大船であった。大洪水後は、アダムから数えて10代目のノアが第二の人類の始祖となり、ノアの三人の息子セム、ハム、ヤフェトが多く民族の祖先となった。現在のユダヤ人は、セムの子孫と信じられている人々である。

「イスラエルの始祖」と呼ばれるアブラハム（前1900年頃？）は、ノアから数えて9代目か10代目にあたり、南メソポタミアのウルで生まれた。イスラエル民族の4000年の歴史はアブラハムから始まる。紀元前の2000年間は、二つ時代に区分される。

第一期（前1900年頃～前1200年頃）：族長アブラハム、イサク、ヤコブ（後にイスラエルと改名）の時代。イスラエル一族は、エジプトに移住し、奴隷生活を送るが、やがてモーセに率いられてエジプトを脱出し、カナンの地に戻るまでの時代。

第二期（前1200年頃～後70年頃）：カナンに築かれたイスラエル王国の誕生、繁栄、南北分裂、そして滅亡にいたるまでの時代。

日猶同祖論上、重要なのはこの二つの時期である。前述のアブラハムは、神の声を聞き南メソポタミアのウルから北メソポタミアのハランへ父テラ、妻サライ、甥ロトとともに移り住む。ここで、アブラハムは再び「わたしが示す地に行きなさい」（創世記12・1－3）という神の声を聞く。このとき神は、アブラハムに命令に従えば、土地をあたえること、多くの子孫をあたえること、人々の祝福の基となることの三つを約束する。アブラハムは、行き先もわからないまま妻と甥を連れて再び旅立ち、ついにカナン（パレスチナ）地方に入る。そして、シケムの聖所、モレの檜の木まで来たとき、「あなたの子孫にこの土地を与える」（創世記12・7）という神の啓示を受け、アブラハムは祭壇をつくり唯一神ヤハウェと契約する。カナンには先住民がいたが、神はこれ以降などもイスラエルの民にカナンをあたえる約束を繰り返す。ここに、現在まで続いているイスラエルとパレスチナの対立の原因がある。

アブラハムが百歳、妻のサラが90歳になったとき、子供がいなかった二人の間によく実子イサクが誕生する。が、神はアブラハムの忠誠心を試すために「あなたの愛する独り子を連れてモリヤの地に行き、私が命じる山で、彼を焼き尽くす献物として捧げなさい」と命令する。命じられたとおりアブラハムは息子を伴ってモリヤに行き、イサクを縛ってまさに我が子を刃物で殺そうとするが、その瞬間、天使が現れ、「アブラハムよ、子どもに手をかけてはいけない。あなたは独り子をさえ惜しまないで、わたしに捧げようとするのがわかった」と言ってアブラハムを止め、イサクは解放された。代わりに、側にいた雄羊が神に捧げられた。（創世記22）アブラハムは非人間的なほどいかなる場合も神の意志に忠実に従う人物であった。そのため、単に「イスラエルの始祖」としてだけでなく「信仰の父」としてユダヤ教徒から尊敬されている。

イサクはのちに親戚のリベカと結婚して双子の息子エソウとヤコブ（前1700年頃）をもうける。兄のエソウが本来なら家督を継ぐところだが、弟のヤコブは策略を講じてイサクから長子としての祝福を受け、家督を騙し取る。が、それがもとでエソウに殺されそうになり、ヤコブは伯父が住むハランに逃亡する。伯父のもとで14年間はたらいたヤコブは伯父の娘レア・ラケル姉妹と結婚、さらに召使のジルバとビルハを妾として、12人の息子（ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルン、ガド、アシェル、ダン、ナフタリ、ヨセフ、ベニヤミン）をもうける。このヤコブの息子たちがイスラエル十二部族の祖となった。ただし、十二部族は、そのまま12人の息子から出たわ

けではなく、レビとヨセフを除いた10人から十部族が生まれ、残り二部族はヨセフの2人の息子(マナセ、エフライム)から出た。レビ族は代々祭司職についたため十二部族外で、固有の土地をもたず、他の部族の支援を受けて生活した。モーセは、レビ族から生まれた。ヤコブは、大家族を率いてハランからカナンに帰還することを決意するが、カナンに帰る途中、川の渡して天使に襲われ前進を阻まれる。一晚中、二人は大格闘をした結果、ヤコブが勝ち、天使に祝福を要求する。天使はヤコブ(「かかと」という意味)の名前を訊いた後、「あなたはもはや名前はヤコブとは言わず、イスラエルと言いなさい。あなたが神の使いと力を争って勝ったからです。」と言ったという。(創世記32・24—28)イスラエルというのは「神と争い勝つ者」という意味の最高に栄えある名前なのである。それ故、ヤコブが改名するとヤコブの子孫も好んでイスラエルという名前を使うようになった。天下無敵、最強の民になることを願ったからだろう。しかし、現実には飢饉による食料不足からイスラエル一家はエジプトに移住し、その後の400年間(前17世紀～前13世紀)はエジプトで奴隷として暮らすこととなる。

ファラオによるイスラエル人迫害が激しくなった時、羊飼いをしていたモーセ(前1357年?～前1237年?)は神の山ホレブで“燃える柴”の中から「ファラオの奴隷となって苦しんでいるイスラエル人を救い出し、乳と蜜の流れる地カナンへ導け」という(出エジプト記2～4章)。神に重大な使命をあたえられたモーセは、雄弁家の兄アロンとともにファラオ(パロ)のもとへ赴き、イスラエル人の解放を訴えるが拒絶される。そこで、神はエジプトに「十の災い」を起こして、パロにイスラエル人のエジプト脱出を認めさせる。モーセ率いるイスラエル人はシナイ山にむかう「葦の海」(かつては紅海と訳されていたが、最近では原語直訳の「葦の海」がよく使われる)に辿り着いた時、心を翻したパロの命令によりエジプト軍がイスラエル人を追跡してくる。このときモーセは、有名な「紅海の奇跡」を起こしてエジプト軍を撃退し、エジプトを出発してから3ヵ月後、シナイ山に到着する。山頂でモーセは「十戒」をはじめとする新たな契約(シナイ契約)を神と結び掟を記した2枚の石版を授与された。石版は、アロンの杖とマナ(食料の一種)のはいった壺とともに純金で覆われた「契約の箱」に納められた。モーセが示した箱の寸法と形は次のとおりである。

「アカシヤ材の箱を作らなければならない。長さは2キュビト半、幅は1キュビト半、高さは1キュビト半」(出エジプト記25・9—10)

1キュビトは約44cmである。したがって長さは110cm、幅と高さは約66cmである。

「箱のために四つの金の環を鋳造し、それをその四隅の基部に取りつける。一方の側に二つの環を、他の側にほかの二つの環を取りつける。アカシヤ材で棒を作り、それを金でかぶせる。その棒は、箱をかつぐために、箱の両側にある環に通す」(同25・12～14)

「棒は箱の環に差し込んだままにしなければならない。抜いてはならない。

わたしが与えるさとしをその箱に納める。また純金の『贖いのふた』を作る。長さは二キュビト半、幅は1キュビト半」(同25・15～17)

「贖いのふた」の上には、翼を広げて向かい合った二人の天使(ケルビム)が跪いている。この長方形の箱は「至聖所」と呼ばれた立方体のテントの中に安置され、「至聖所」はさらに「幕屋」と呼ばれた長方形のテントの奥に置かれた。幕屋の周囲はさらに縦約45m、横約22m、高さ約2.2mの幔幕が張られて長方形の空間を形作っていた。

モーセの「契約の幕屋」は、その後、ソロモン王の時代になると、大規模化され神殿が造営された。神殿の大きさは次のごとくであった。

「ソロモン王が主のために建設した神殿は、長さ60キュビト、幅20キュビト、高さ30キュビトであった」(「列王記 第一」6・2)

エジプトを脱出したイスラエル人一行は、カナン国境にたどり着くがカナン先住民の防衛は強固で、40年にわたって周辺の荒野を彷徨うことになる。その間、イスラエル人集団の中心には常に「契約の箱」があった。モーセが120歳で没したあとは、モーセの後継者ヨシュアと士師と呼ばれた指導者たちが先住民を軍事力で倒してカナンの地を征服し、前1000年頃にはベニヤミン族の美青年サウルを王に擁立してイスラエル国を誕生させた。サウル王は無能な王であったが、2代目ダビデ王(前976年)はイスラエル全域を完全に統一してエルサレムを都と定め、「契約の箱」をエルサレムに安置した。

前6世紀以降、領土を失ったイスラエル人はメシアを求めるようになるが、そのメシアはこの偉大なるダビデ王の子孫から現れると信じた。

3代目ソロモン王(前961年)の時代、経済的に発展し、王国は大いに栄え、壮大な宮殿や神殿が建設された。が、人民は重税に苦しみ、王の死後、専制政治への不満から王国は北のイスラエル国(十部族)と南のユダ国(二部族)の二王国に分裂した。(前926年?)約200年後、北のイスラエル国は、アッシリアに滅ぼされ(前722年)、イスラエル人はアッシリアに連れ去られた。この時に消えたイスラエル人がいわゆる「失われた十部族」である。残存したユダ王国では、同じ時期に預言者イザヤが全裸で3年間エルサレムを徘徊しながら預言活動を行っていた。イザヤは、アッシリア人に連行されたイスラエル人の運命について次のように預言したという。

「島々よ。(日本聖書協会口語訳聖書では「海沿いの国々」)わたしの前で静まれ。諸国の民よ。新しい力を得よ。近寄って今、語れ。われわれはこぞってさばきの座に近づこう。だれが、一人の者を東から起こし、彼の行く先々で勝利を収めさせるのか。彼の前に国々を渡し、...彼は彼らを追いまだ歩いて行ったことのない道を安全

に通って行く。

…島々は見て恐れた。地の果ては震えながら近づいて来た。彼らは互いに、その兄弟に『強くあれ』と言う」（「イザヤ書」41・1-3, 5）

ここで預言を聞くべき対象は人ではなく「島々」であり、「一人の者を東から起こし」とある。場所は「地の果て」である。

また、イザヤは世界中に離散したユダヤ人が帰還することも預言したという。

「ある者は遠くから来る。また、ある者は北から西から、またある者はシニムの地（中国）から来る」（「イザヤ書49・9, 12」）

イザヤは離散したイスラエル人の一部がシニムの地、つまりアジアへ移り住んだことを知っていたわけである。

南のユダ王国も新バビロニアに滅ぼされる（前587年）が、レビ族を含むユダ族とベニヤミン族は、他民族支配下においても、神殿を築いて宗教社会を形成し、新たな民族的結束を強くしていった。やがて、このユダヤ共同体もローマ軍の攻撃を受けて神殿もろとも完全に滅ぼされ、ユダヤ人は世界各地に離散するが、ユダ族とベニヤミン族は2千年間消えることなく存在し続けた。それに対し、紀元前722年にアッシリアに連れ去られた十部族（エフライム、マナセ、ガド、イッサカル、シメオン、ルベン、アシェル、ダン、ナフタリ、ゼブルン）は完全に消息が不明で、今日その存在は「失われた十部族」と呼ばれている。

以上、見てきたように、日本の宗教がおおむね自然物崇拜であるのに対して、ユダヤ教は神の声を聞いた者や預言者の言葉に神の意志を認める啓示宗教である。そして、重要なことは神の啓示と顕現が起こった場所は、山の中か川べりか木の下であったということなのである。今日でもユダヤ人は、そういう場所で誰かが啓示を受けることを期待している。

ユダヤ教と日本の神道

「失われた十部族」がイザヤの言葉通りアジアの地の果てにある東方の島々を目指して東進し、最終的に極東の地日本に到達してユダヤ教を基に日本神道を創造したという見解は明治時代から存在した。明治初期に12年間日本に滞在したスコットランド人商人ノーマン・マクレオドは、1875年に『古代日本史の縮図』を出版し日猶同祖論を説いた人物として有名である。日本人では、佐伯好郎、小谷部全一郎、酒井勝軍、竹内巨鷹、中田重治、手島郁郎、宇野正美などが日猶同祖論者として有名である。

日猶同祖論の根拠は、古代ユダヤと古代日本の宗教および「消えた十部族」と日本の皇室の間には多くの類似性が存在することである。

例えば、ユダヤ教も日本神道も偶像崇拝を禁止している。また、世界広しといえども「三種の神器」というものがあるのは日本とイスラエルだけであろう。それぞれ伊勢神宮に納められている「八咫の鏡、草薙剣、八尺瓊勾玉」と契約の箱に納められている「モーセの石版、アロンの杖、マナの壺」である。

さらに、契約の箱と日本の神輿は形状や寸法が非常によく似ている。「ミコシ」という言葉は日本語としては無意味だが、ヘブル・アラム語では聖所のことを「ミコダシュ」と呼ぶので、「ミコダシュ」が訛って変化し「ミコシ」になったのかもしれない。²⁾ 神輿の上に鎮座する翼を広げた鳳凰も契約の箱の上に乗っている一対の天使ケルビムと似ている。

契約の箱は、エルサレムの神殿から消失して現在は所在が不明だが、日本には徳島県の剣山に隠されているという説がある。昭和11年から昭和13年にかけて、高根正教という人物が、剣山が人工的な山であるかどうかを探索した。当時の新聞は高根氏の探索を「ソロモンの秘宝探し」と書きたてた。³⁾ 最近も宇野正美氏が著書のなかで契約の箱が剣山の内部に隠匿されている可能性が高いことを詳述している。宇野氏は、童話「かごめ、かごめ」は剣山に契約の箱が隠されていることを示唆する暗号と見る。⁴⁾

♪かごめ、かごめ	(隠された意味) ダビデの星、ダビデの星
かごの中の鳥は	籠の中の鳥(ケルビム)は
いついつ出やる	いつ発見される
夜明けの晩に	暗い夜明け前
鶴と亀がすべった	鶴と亀がつく所
後ろの正面だ一れ	その背後には何がある

正三角形と逆三角形を重ねたマーク「籠目」は、イスラエルでは「ダビデの星」と呼ばれユダヤ人を表すシンボルのひとつである。剣山は、昔は鶴亀山と書かれていた。鶴と亀に関係しているわけである。また、剣山のなかには栗枝渡(くりしと)神社という鳥居がない神社がある。栗枝渡神社は、元は栗須戸(クリスト)神社といった。⁵⁾ この辺りに隠れキリシタンが住んでいたことは間違いない。

箱は英語でark(アーク)という。日本に点在する「ハコ」や「アーク」がつく場所(箱根、阿久根、箱崎、函館など)は契約の箱となにか因縁のある地なのかもしれない。

宇野氏は、毎年7月17日剣山山頂に地元民が神輿をかつぎ上げていく風習も古代ユダヤ人の集落が徳島山中に存在したことの一つの証拠としてあげている。なぜならば、7月17日というのは、ノアの箱舟が大洪水後にアララト山に漂着し、新しい時代が始まった記念日だからである。京都では、7月17日には、祇園祭が行われ八坂神社の山鉾巡業がある。⁶⁾ 「ヤサカ」は日本語では無意味だが、ヘブル語には「イヤサカ」というよく似た言葉があり、「神を讃える」という意味の言葉である。⁷⁾

また、徳島県美馬市内の白人神社には磐境（イヤサカ）と呼ばれる石造り礼拝所跡があり、それはパレスチナに現存するモーセの後継者ヨシュアが造営した石の礼拝所と非常によく似ている。⁸⁾

徳島の山村は皇室とも不思議な因縁があり、美馬には、かつて大嘗祭の折に天皇陛下が着る神聖な麻の着物「アラタエ」を作る忌部氏一族が住んでいたといわれている。その末裔の三木家が今でも木屋平村という村に住んでいて「アラタエ」を大嘗祭の折には天皇陛下に奉納している。⁹⁾

また、徳島県内にある倭大国魂神社（やまとおおくにたまじんじゃ）の神紋は、七枝の木の形をしており、「メノラー」と呼ばれるユダヤ人のシンボルに似ている。「メノラー」は至聖所におかれる七枝の蜀台で、「ダビデの星」よりもずっと強くユダヤを象徴するものである。¹⁰⁾ 奈良県天理市の石上神社に伝わる「七支刀」も「メノラー」によく似ていることで知られている。¹¹⁾

四国の剣山以外にも、全国各地にイスラエル人に関係していると目される場所がある。長野県の諏訪大社もそのひとつで、諏訪大社には、前述したアブラハムの物語に登場するイサク奉納の話を彷彿させる「御頭祭」がある。¹²⁾ 諏訪大社の本殿は「守屋山」にあり、アブラハムがイサクを神に捧げようとした地モリヤ（後のエルサレム）と同じ名前である。「御頭祭」においては、八才ぐらいの少年が2mくらいの大柱に縛られ、神官が刃物を振り上げて子供を殺す振りをする。そのとき使者が馬に乗って登場し、それを阻止し、少年を解放する。まさしくアブラハムのイサク奉納の再現劇である。

他にも、京都の太秦にある大酒神社がイスラエルと関係がある神社としてよく知られている。佐伯好郎氏は大酒神社をダビデ王を偲んで景教徒（ネストリウス派キリスト教徒）の秦氏が建てた神社とみている。大酒神社は、古くは「大辟神社」と書かれていた。「大辟」は中国ではダビデを意味する。さらに、イスラエルとの関係を裏付けるかのように、神社近くの氏子の家には「いさら井」と呼ばれる井戸が残っており、「いさら井」はイスラエルが訛ったものと考えられている。かつては12個も「いさら井」と呼ばれる井戸が神社付近に存在したという。¹³⁾ 契約の箱は、一時期、井戸の中に隠匿されたことがある。その井戸は「魂の井戸」と呼ばれた。そのせいで、京都には「いさら井」という名の井戸が存在するのではないだろうか。

上記以外に、石川県の押水町にはモーセの墓と呼ばれる古墳が存在するし、青森県新郷村にはキリストの墓と呼ばれる墓まである。¹⁴⁾

山伏と天狗の姿がユダヤ教徒の姿によく似ていることも、ユダヤ人が古代日本に存在したことのひとつの証としてよく言及される。白い服を着、頭に黒い箱「兜巾（とぎん）」をつけ、法螺貝を吹き、山で修行する日本の山伏は、フィラクテリーと呼ばれる黒い箱を額につけ、ショーファーと呼ばれる角笛を吹くユダヤ教徒の姿にそっくりである。天狗も山伏の格好をしているが、異常に大きな突き出た鼻、大きな目、赤ら顔が特徴的で、手には「虎の巻」をもっている。旧約聖書では、創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記の五書の巻物を「トーラ」という。「虎の巻」の「虎」は当て字で、「虎の巻」はトーラ五巻の巻物を指していると思われる。¹⁵⁾

日本各地で出土する埴輪の独特の髪型「みずら」も古代イスラエル人の両耳の前の髪を長く伸ば

して三つ編みにしたりカールしたりする「ペイオト(peyot)」とよく似ている。旧約聖書に「あなたがたの頭のびんの毛をそり落としてはいけない」(レビ記19・27)と書いているのでイスラエル人の男性は両耳の前の髪を肩のちかくまで伸ばしていた。¹⁶⁾

失われた十部族と日本の皇室

日本の皇室とイスラエルの王家との結びつきを示すものも数多く存在する。まず第一に神話である。日本の神話のニニギからウガヤフキアエズ、神武天皇にいたるまでの系図は『聖書』におけるヤコブからエフライム、ヨシユアにいたる系図によく似ている。ほとんど同じである。

記紀によると、最初に天から降りるはずだったのはニニギではなく父親のオシホミミだった。が、父親が準備をしている間にニニギが生まれたので、結局、父親に代わってニニギが降りることになる。その結果、ニニギが大和民族の父祖となる。同様に聖書によると、初め父親のイサクが双子の息子のうち祝福するつもりだったのは兄のエサウだったが、弟のヤコブに騙されてヤコブの方を祝福してしまう。その結果、ヤコブがイスラエル民族の父祖となる。

天から降りたニニギは、美女コノハナサクヤヒメに恋をして彼女を妻にしようとするが、彼女の父親は、コノハナサクヤヒメだけでなく彼女の醜い姉までニニギに押し付けようとする。しかし、ニニギは姉のほうは父親に返してしまう。同様に聖書によると、ヤコブは美女ラケルに恋をして彼女を妻にしようとするが、彼女の父はラケルだけでなく姉のレアもヤコブに面倒を見させてしまう。ヤコブは、両方を娶るが姉のほうは美しくなかったので嫌う。明らかに、ニニギとヤコブの間には驚くべき対応関係がある。

その後、ニニギは、妻のコノハナサクヤヒメとの間に山幸彦をもうけるが、山幸彦は、兄の海幸彦にいじめられて、海神の国へ赴く。そこで山幸彦は神通力を得て、凶作をおこし兄に報復するが、その後、兄と和解する。同様に、聖書においてヤコブは、愛妻ラケルとのあいだにヨセフをもうけて溺愛するが、ヨセフは嫉妬した兄たちの手でエジプトへ奴隷として売り飛ばされる。が、ヨセフはエジプトで大出世して宰相の地位にまでのぼる。一方、その間、カナンにいる兄たちは凶作で苦しみ、食料をもとめてエジプトへやって来る。兄たちと再会したヨセフは、過去を水に流して和解する。このように山幸彦とヨセフの間にも対応関係がある。

山幸彦は、海神の娘トヨタマヒメを娶って、ウガヤフキアエズをもうける。ウガヤフキアエズには、4人の息子が生まれて、2番目と3番目の息子は行方不明になるが、4番目の息子が後に神武天皇となり、大和の国を征服して日本の皇室の祖となる。聖書では、ヨセフはエジプトの妻子の娘を娶り、マナセとエフライムをもうける。エフライムにも4人の息子が生まれて、2番目と3番目の子供は夭折するが、4番目の勇敢な息子ヨシユアがカナンの地を征服し、エフライム族がイスラエル10支族の王族となる。山幸彦の子孫とヨセフの子孫の間にも明白な対応関係がある。¹⁷⁾

どうみても、日本の皇室の神話は古代イスラエルのエフライム族の神話が基になっているとしか思えない。紀元前722年に、古代イスラエル王国から消えたエフライムを中心とする十部族は、日

本に渡来し、紀元前660年頃、初代天皇として神武天皇を擁立して大和の国を創始したのではないかという推測が生じるのも不思議ではない。神武天皇の正式名は「カム・ヤマト・イワレ・ビコ・スメラ・ミコト」で、日本語としては意味不明であるが、ヘブル・アラム語として読むと大体「大和の創始者はヘブル人であり、その王国サマリア（南北分裂後の北のイスラエル王国）から渡来した」という意味になるという。

また、日本の皇室の紋章として一六菊花紋と「獅子と一角獣」が使われていることも、日本の皇室と古代イスラエル王室との繋がりを立証するものとしてよく引き合いにだされる。一六菊花紋は、エルサレムのヘロデ門上部にある紋章とほとんど同じ形である。菊か向日葵のように見えるこのマークは、イスラエルに限らず中近東各地でつかわれる王家の紋章である。日本の皇室の一六菊花紋は、中近東の王室との結びつきを示すものである。また、もうひとつの皇室の紋章は「獅子と一角獣」であるが、獅子はユダ族の紋章で一角獣はヨセフ族（後のエルサレム族とマナセ族）の紋章である。これも日本の皇室と古代イスラエルの王族のひとつの共通点である。

伊勢神宮の石灯籠に彫られたカゴメのマークや八咫鏡の裏面に書かれているといわれているヘブル文字も日本の皇室と古代イスラエルの繋がりを示すものとしてよく取り上げられる。

三笠宮宗仁親王（以下、三笠宮殿下）は、ヘブル語が堪能であり、古代オリエントの歴史に詳しい考古学者としてよく知られている。現在（2006年）の駐日イスラエル大使であるエリ・コーヘン氏は、三笠宮殿下に謁見した際、日本とイスラエルの多くの驚くべき共通点について語られたという。会談後、三笠宮殿下は大使のもとに次のようなメッセージを送られた。

「イスラエル民族と日本民族は違う民族である。しかしながら民族の違いはあったとしても、協力していく方法やお互いに学び合う道は見出すことができる」

婉曲に日猶同祖論を否定しているような感じをうける。

無論、外見から明白なように皇族も一般日本人も100%ユダヤ人ではない。日本人は、中近東・中国・台湾・朝鮮半島・ロシア・東南アジア・ポリネシアなどから渡来してきた人々の混合種である。イスラエル人の血や影響などは日本人全体から見ると非常に小さな部分しかしめていない。しかし、日本の伝統文化の中核である神道には、これまで見てきたように古代イスラエル人の影響が非常に強く表れていることは否めないのである。

日本語とヘブル語

「ヤサカ」、「虎の巻」以外にヘブル語起源らしい日本語は数千語あるといわれている。例えば、数の「イチ、ニイ、サン、シイ、…」という数え方は中国語起源であるが、「ヒイ、フウ、ミイ、ヨオ、イツ、ムウ、ナナ、ヤア、ココノ、トオ」という数え方はヘブル語起源ではないかと言われている。この意味不明な言葉は、もともと、アマテラスが天の岩戸の中に隠れたとき、コヤネが神

様を外に出そうとして発した言葉だった。訛りを修正してヘブル語として読むと意味の通じる言葉になる。「ヒヤ、ファ、ミ、ヨッ、ツイア、ナーネ、ヤア、カヘナ、タウォ」となり、訳すと「誰がその美しいかたを連れ出すのでしょうか。誘いにいかなる言葉をかけるのでしょうか」という意味になる。¹⁹⁾

相撲の意味不明の掛け声「ハッケ、ヨイヨイ、ノコッタ」もヘブル語だと「ハッケ」は「撃て」、
「ヨイヨイ」は「やっつけろ、やっつけろ」、「ノコッタ」は「敵に勝った」という言葉なので意味が通じる。²⁰⁾

日本語の「ありがとう」は、ヘブル・アラム語では「アリ・ガド（わたしにとって幸運です）」、「はずかしめ」は「ハデカシム（名を踏みにじる）」、「あなた、あんた」はヘブル・アラム語では「アター、アンタ」である。意味も発音も全く同じものは「壁」、「火傷」「におい」、「書く」、「住む」、「語る」、「いつ」、「困る」、「辺り」で、これらの言葉はそのままヘブル語として通用する。

神道用語もヘブル・アラム語起源の言葉として考えると意味が解るようになる。例えば、神輿をかつぐときの掛け声「エンエラヤー」は「エアニ・アハレ・ヤー（わたしはヤハウエを賛美する）」から来ていると思われる。「ハレ」は、ヘブル・アラム語では「栄光」という意味で、「ケ」は「俗」の意味である。「ヤシロ」は、ヘブル語では「ヤ」はヤハウエを意味し、「シロ」は「神の器（乗物）」を意味するので、「ヤハウエの器（乗物）」という意味になる。「神主」、「禰宜（ねぎ）」、「祝（はふり）」は、ヘブル・アラム語では、それぞれ「カム・ナシ」、「ナギ」、「カフリ」と呼ぶ。

日本語とヘブル語の間には意味も発音もよく似た言葉が非常に多くノーマン・マクレオドが作成した両言語の対照表を見るとこれほどよく似た言語があるかとただただ驚くばかりである。²¹⁾

民謡にもヘブル語のものが多く大学教授川守田英二氏が発見したヘブル語の民謡は50曲をこえる。²²⁾

また、文字においても日本語のかな文字とヘブライ・アルファベットは非常によく似ている。²³⁾特に「コ、ク、ト、ノ、フ、レ、ラ、ナ、ル」と「そ、あ」は両言語において同一である。かな文字はカナン文字が起源なのかもしれない。

数字の隠された意味

以上のような日本とイスラエルの伝統文化の類似性から日猶同祖論を肯定するなら、なぜ日本の文化の基本形が長方形かという謎は簡単に解ける。聖書の中で神が人間に作らせた物の寸法が細長い直方体だからだ。ノアの箱舟は、長さ300キュビト×幅50キュビト×高さ30キュビトであった。契約の箱の寸法は、長さ2キュビト半×幅1キュビト半×高さ1キュビト半であった。幕屋の寸法は、奥行き100キュビト×間口50キュビト。幕屋を覆う天幕の一枚の大きさは、長さ30キュビト×幅4キュビトであった。これらのことから古のユダヤ系日本人は、神様は長方形が好きだと考え、身の回りの物を出来る限り長方形にしたのであろう。畳は長方形の物の代表だが、畳を考案したのはイスラエル人に違いないと推測する人々がいる。なぜならば畳の寸法はセンチメートルで表すと87cm

×174cm（東日本の場合）という半端な数字なのだが、これをバビロン捕囚後の古代イスラエルのキュビト（1キュビト=43,7cm）で表すと、ちょうど2キュビト×4キュビトになるからである。²⁴⁾ 量がいつ作られたかは不明だが、日本に渡来したイスラエル人は、最初はキュビトで物を測っていたようだ。

興味深いことに現在使用されている大型タンカーの形はノアの箱舟と同じであるという。ある日本の造船会社の研究チームは、波の影響をもっとも受けない安全かつ高速で航行できる「もっとも理想的な大型船の形」を研究した結果、「タンカー級の大型船にとって最も理想的な形は、長さが幅の6倍、高さの10倍となる形である」という最終結論に達した。

これは「黄金比」と呼ばれ、大型船の基本となっている。この比率は四千年以上前に作られたノアの箱船の寸法と一致する。²⁵⁾ ノアに箱船を建造させた神様は、大数学者であったようだ。

ユダヤ人は、創造主である神が偉大な数学者であることに早くから気づいていた。神はしばしば我々に数字でささやく。だから、ユダヤ人は、カバラ（Kabbala）と呼ばれるユダヤ密教にふくまれるゲマトリア数秘術を昔から重んじてきた。ゲマトリアとは文字の数値変換である。1, 2, 3…というような現在われわれが使っているアラビア数字が普及する以前は、アルファベットが数字の役割を果たしていた。例えば、ヘブル語アルファベットの場合、アレフ=1, ベート=2, ギメル=3…というように文字と数字が対応する。ギリシャ語アルファベットならばアルファ=1, ベータ=2, ガンマ=3…というように文字と数字が対応する。一つ一つの文字は文字であるだけでなく数字を表していた。ゲマトリアでは、ヘブル語のアルファベットとギリシャ語アルファベットが併用される。どちらのアルファベットを使ってもいいことになっている。それは、ユダヤ人の始祖セムとギリシャ人の始祖ヤフェトはともにノアの息子で、イスラエル人とギリシャ人は同根の民族だからである。

冒頭で述べたなぜ日本では「八」という数字が神を表すかという謎であるが、一つの説明は「ヤサカ」とか「ヤハタ」の「ヤ」はヤハウエを表すという考えである。ヘブル人はヤハウエのことを縮めて「ヤ（一）」と言う。もうひとつの説明はゲマトリアでは、神や神に関係したものは8の倍数になるから「八」は神を表すという考えである。例えば、「主」という意味のギリシャ語「キュリオス」を数字に変換して合計すると800になる。「イエス」のギリシャ語名「イエスース」を数字に変化して合計すると888になる。8はイエスに深く関わった数字で、救いの象徴数である。

ヘブル語のアルファベットで「ヤハウエ」と書き、数字に変換して合計すると26になる。したがって、26も神を表す重要な数字である。「主」を表すヘブル語の「ハドーン」のゲマトリアは66なので、66も重要な数字である。

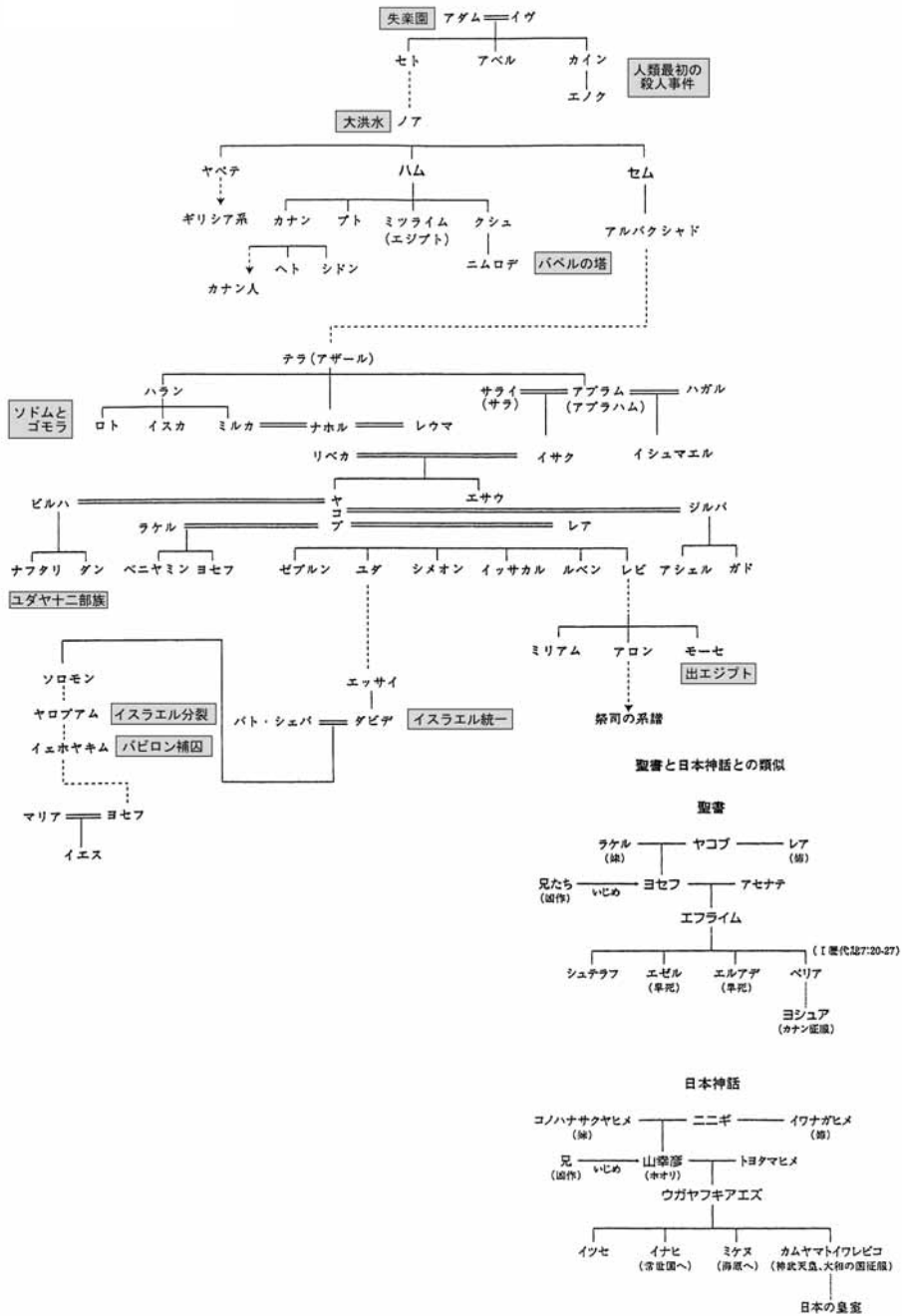
幕末や明治生まれの著名人の多くは、名前のなかに数字がはいっていた。35という数字がついた著名人に岩永三五郎と直木三十五がいる。琵琶は、3尺5寸なので三五という異称がある。追善供養は、死後35日目である。日本の文化において、35という数字は神秘的な数字のひとつだが、これも契約の箱の縦横の比率が、3:5であることとイエス・キリストのゲマトリアが888:1480で、

3：5であることに由来するのかもしれない。その他の著名人、吉田五十八、山本五十六の58、56なども聖書中の重要人物か重要な語のゲマトリアではないかと私は推測する。

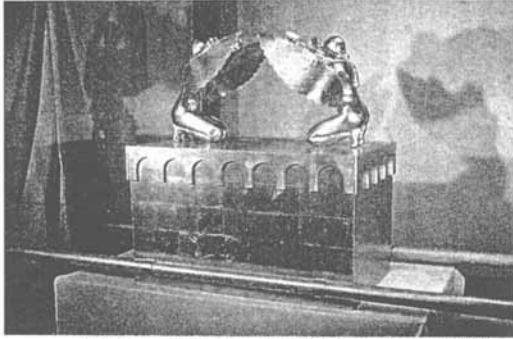
注：

- 1) ユダヤ大事典編纂委員会編『ユダヤ大事典』荒地出版社 p.14
- 2) 久保有政『日本の中のユダヤ文化』学研 p.234
- 3) 宇野正美『古代ユダヤは日本で復活する』日本文芸社 p.18-22
- 4) 宇野正美 同 pp.16-18
- 5) 宇野正美 同 pp.158-162
- 6) 宇野正美 同 pp.26-30.
- 7) 宇野正美 同 p.60
- 8) 宇野正美 同 pp.53-55
- 9) 宇野正美 同 pp.66-72
- 10) エリ・コーヘン『大使が書いた日本人とユダヤ人』中経出版 p.155
- 11) 宇野正美 同 pp.56-58
- 12) ラビ・マーヴィン・トケイヤー「日本・ユダヤ封印の古代史」 pp.132-136
- 13) ラビ・マーヴィン・トケイヤー 同 p.248
- 14) 久保有政 同 pp.262-265
- 15) ラビ・マーヴィン・トケイヤー 同 pp.182-185
- 16) 久保有政 同 pp.129-132
- 17) 久保有政 同 pp.172-175
- 18) エリ・コーヘン 同 p.148
- 19) 久保有政 同 p.272
- 20) 宇野正美 同 p.62
- 21) ノーマン・マクレオド『日本固有文明の謎はユダヤで解ける』徳間書房 pp.125-130
- 22) 川守田英二『日本の中のユダヤ』
- 23) ヨセフ・アイデルバーグ『大和民族はユダヤ人だった』 pp.137-140
- 24) 久保有政 同 p.128
- 25) 久保有政『ゲマトリア数秘術』学研 pp.24-26

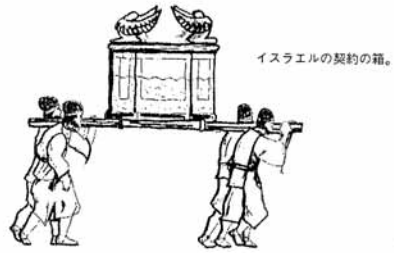
資料



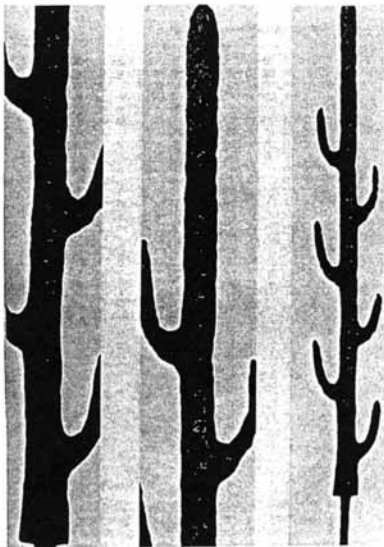
日本の皇室の系図と聖書のエフライムの系図とは、骨子が瓜二つである。これは、皇室の起源がエフライム族の王家であることを示すのか？



『旧約聖書』『出エジプト記』の「契約の箱」の記述を忠実に再現して、著者がつくった「契約の箱」の模型。腹のふたにおおわれ、両側に二つの金のケルビムがおかれている



御神輿。栃木県日光市・二荒山神社では、かつぐ人々は白い祭服を着用し、御神輿は金でおおわれている。(©方言ガネ/HAGA LIBRARY)



奈良県天理市の石上神社に伝わる七支刀



天皇家の十六部紋が染めぬかれていた東祖谷村栗枝渡神社のハッピ

キリストの名を暗示させる東祖谷村の栗枝渡神社



モーセの後継者ヨシュア一行が居を定めたアラドにつくられた礼拝所。日本の白人神社(右ページ)のものどよく似ている



白人神社のイヤサカ(發境)。古代イスラエルの礼拝所(左ページ)を思わせるような石垣が積まれている



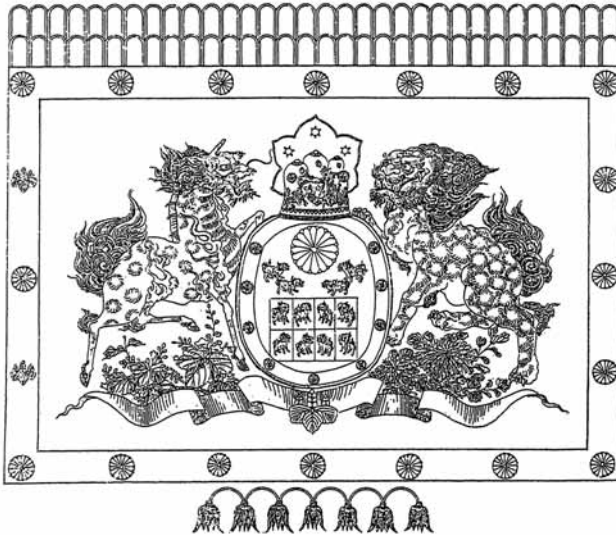
↑上から順に、諏訪大社の前宮、本宮、春宮、秋宮。諏訪大社には、古代イスラエル宗教と深くかかわる重大な儀式が伝えられていたのだ。



「いさら井」



ユダヤ教の至聖所にあった七枝の燭台(左)と、四国の倭大國魂神社の七枝の神紋



マフレオドはこの図柄を「イスラエルとユダの統一紋章」と解した。両側の動物は、右が獅子、左はユニコーン（一角獣）である。両者に挟まれた中央上部に天皇の王冠が描かれている（25ページ参照）。こうした獅子とユニコーンの組み合わせは、京都御所（旧皇居）や、太閤秀吉の宮殿の門にも見られる[「ソロモン宮殿の石と日本の皇室紋章」（スミス聖書事典）より]。



矢野祐太郎が写し取ったという八咫鏡の裏の文字。

イスラエル十二部族の紋章



ダン（まむし）



ナフタリ（雄牛）



ルベン（まんだらげ）



シメオン（剣と盾または城）



ガド（宿営）



アシェル（オリーブの木）



レビ（胸当てまたはウリムとトンム）



ユダ（獅子）



ヨセフ（マナセとエフライム）（野牛）



ベニヤミン（獅）

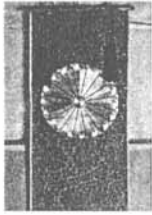


イッサカル（ろばまたは月と星）



ゼブルン（舟）

東京・渋谷のシナゴークに飾られた十二部族の紋章。創世記48章や申命記33章に基づく想像図であり、シナゴークによって若干デザインや内容が異なる。ダビデの星が描かれたものもあるが、これは17世紀以降につけ加えられたものである。



鏡の銅版にある重葺の菊の紋。
(東京国立博物館蔵)



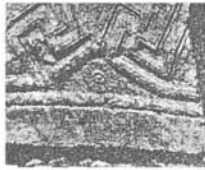
エルサレムのヘロデ
門上部にあるマーク。



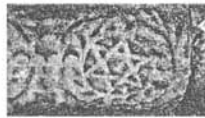
平安京の朝堂院跡から
出土した十六花卉
紋。エルサレムの紋
に非常によく似て
いる。



ベルシャ・スサ出土「ナラム・シン
戦勝碑」にある紋。



エルサレムの遺跡から出土した十六
花卉紋。



イスラエル・カベナウムのダビデの
星。圖は五角形の星のマークである。



真名井神社のカゴメ紋。



伊勢神宮のカゴメ紋。



日本を愛して死んだあるユダヤ
人のお墓。日本武の灯籠を墓碑
に(横浜の墓地)。



山伏 (毎日新聞社提供)



フィラクテリー



ショーファール

天狗。左手にあるのは虎の巻。



Ancient Japanese Samurai's hair style "mizura" (left) and Jewish "peyot" (right)

日本語（大和言葉）とヘブル語の類似表

日本語		ヘブル語		
発音	意味	発音	表記	意味
■名詞				
アタリ	辺り	アタリ	אתר	辺り
ヤケド	火傷	ヤケド	יקר	火傷
ニオイ	匂い	ニホヒ	ניחוחי	匂い
イト	糸	フト	חוט	糸
ヌサ	幣	ネス	נס	旗
ウデ	腕	ヤド	יד	手
カタ	肩	カタフ	כתף	肩
コトバ	言葉	キタバ	כתב	書き物
オフリ	終わり	アハリ	אחרית	終わり
キョウ	今日	カヨム	כיום	今日
サムライ	侍	シャムライ	שמרי	守る者
アガタ	県	アグダ	אגודה	集団
ヌシ	主	ナシ	נסיא	長
ツチ	土	ツイウ	טי	土
カネ	金	カネー	קנייה	買う
カワ	皮	カファ	חפוי	おおう
コドモ	子供	コタン	קטן	小さい
ワラベ	童	ワラッベン	בן וול	男の子
コエ	声	コル	קול	声
クサ	草	クシュ	קש	わら
ミス	水	ミツ	מיץ	ジュース
クサリ	鎖	ケセリ	קשר	つながり
サラ	皿	セイル	סיר	丸い入れ物
ヤリ	槍	ヤリ	ירי	射る
アシタ、アサツテ	明日、明後日	アテイド	עתיד	未来
ハズカシメ	辱め	ハデカシエム	השם הרך	名を踏みにじる

日本語		ヘブル語		
発音	意味	発音	表記	意味
■動詞				
アルク	歩く	ハラク	הלך	歩く
ハカル	測る	ハカル	חקר	調べる、測る
ホロブ	減ぶ	ホレブ	חרב	荒れる、減びる
テル	照る	テウラー	תאורה	照明
マガル	曲がる	マガル	מעגל	円
トル	取る	トル	טול	取る
カマウ	構う	カマル	חמל	同情を寄せる
ダマル	黙る	ダマム	דמם	黙る
ハシル	走る	ハシ	חוש	急ぐ
ネムル	眠る	ヌム	נמ	まどろむ、居眠り
カル	刈る	カラー	קרע	刈る
ユルス	許す	ユルス	ירש	取らせる
ノボル	登る	ノボー	נב	登る
ニクム	憎む	ニクム	נקם	復讐する
アキナウ	商う	アキナフ	אקנה	買う
カブル	検る	カブル	קבר	うずくまる
カク	書く	カク	קח	書く
スム	住む	スム	שום	住む
ナマル	眠る	ナマル	נמר	眠る

日本語		ヘブル語		
発音	意味	発音	表記	意味
カバウ	庇う	カバア	קבא	隠す
コマル	困る	コマル	חמר	困る
ツモル	積もる	ツボル	צבר	積もる
コオル	凍る	コール	קור	寒さ、冷たさ
アブル	焼る	ボエラ	בעירה	焼く
ホシク	欲しく(なる)	ホシェク	חשק	欲する
キル	切る	キリアー	קריעה	やぶる
ナク	泣く	アナカー	אנחה	うめく
シヌ	死ぬ	シナー	שינה	眠る
スフル	座る	スフル	שאר	休む
ヤスム	休む	ヤズブ	ישב	座る
イム	恐む	イム	אי	ひどい
ハラウ	越う	ハーラー	הלא	遠くへ捨てる
■形容詞・他				
ツライ	辛い	ツラー	צרה	悩み、災難
カルイ	軽い	カル	קל	軽い
ダメ	駄目	タメ	טמא	ダメ、汚れている
イツ	何時	イツ	עת	いつ
エッサ	(加えられた物)再	エッサ	אשא	持ち上げるぞ
エンエラヤー	(聲のかけ声)	エン-アレル-	יהי אהלל אני	我が名を讃めよう
コウ	こう(このように)	コウ	כך	こう(このように)
アリガトウ	ありがとう	アリ-ガド	גדלי	私にとって幸運です
ハレ	晴れ	ハレ	הלה	栄光
ケ	藝	ケ	קל	俗

ヘブライ語と日本語の文字対比表

グループA

ヘブライ語	ק	ג	א	ח	ו	ל	ת	ה	ש	ט	ז	ו
日本語	コ	ケ	カ	ト	ノ	フレ	ワ	ハ	サ	シ	ソ	ヒ
	ko	ku	ka	to	no	fu	wa	ha	sa	so	hi	

グループB

ヘブライ語	ר	נ	ו	ז	ק	א
母音印をつけた場合	ラ	ナ	ウ	イ	ク	カ
日本語	ラ	ナ	ウ	イ	ク	カ
	ra	na	u	so	ko	a

グループC

ヘブライ語	י	ש	מ	ל	י	ל	ל
日本語	ヒ	ス	ミ	ク	イ	リ	ル
	hi	su	shi	mi	ku	i	ru

アレフ א=1	ヨッド י=10	クフ ק=100
ベート ב=2	カフ כ=20	レーシュ ר=200
ギメル ג=3	ラメド ד=30	シン ש=300
ダレット ד=4	メム מ=40	タウ ט=400
ヘ ה=5	ヌン נ=50	カフ פ=500
ヴァヴ ו=6	サメフ ס=60	メム צ=600
ザイン ז=7	アイン ע=70	ヌン ך=700
ハット ח=8	ペー ף=80	ペー ף=800
テット ט=9	ツァディ ץ=90	ツァディ ץ=900

↑ヘブル語アルファベットの数値。注：ヘブル語アルファベットは22文字であり、タウが最後である。だが、カフ、メム、ヌン、ペー、ツァディの語尾形の文字（表の最後の5文字）を、500以上の数値を表すものとして使用することがある。たとえば、ペーの語尾形 ף は、内容により80または800を表す。

アルファ Αα=1	イオタ Ιι=10	ロ Ρρ=100
ベータ Ββ=2	カッパ Κκ=20	シグマ Σσς=200
ガンマ Γγ=3	ラムダ Λλ=30	タウ Ττ=300
デルタ Δδ=4	ミュー Μμ=40	エプシロン Τυ=400
エプシロン Εε=5	ニュー Νν=50	ファイ Φφ=500
ステイグマ Ϛ _{注1} =6	クシイ Ξξ=60	カイ Χχ=600
ゼータ Ζζ=7	オミクロン Οο=70	サイ Ψψ=700
エータ Ηη=8	パイ Ππ=80	オメガ Ωω=800
セータ Θθ=9	コッパ Ϟ _{注2} =90	サンブシイ Ϡ _{注3} =900

↑ギリシア語アルファベットの数値。注1：ステイグマはギリシア語アルファベットにはないが、6として用いられる。シグマの語尾形に形が似ている。なぜそれが6として用いられたのかは不明で、ミステリアスでさえある。注2：コッパはオミクロンの小文字と同じだが、今のギリシア語アルファベットにはない。古い時代に90として用いられた。注3：サンブシイも今のギリシア語アルファベットにはないが、古い時代に900を表す数字として用いられた。ギリシア語アルファベットの最後はオメガである。